

---

# 十三番目の秘術

秋乃 夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十三番目の秘術

### 【Nコード】

N4427BA

### 【作者名】

秋乃 夜

### 【あらすじ】

戦国時代と見せかけて始まる中世ファンタジー。

イロハは西方から伝わった「天葬」という葬儀に疑問を持ち、大陸東方に作られたヤマト街を出て、神学校に入学する。天葬について調べながら三学年になったある日、イロハは友人から不穏な噂を聞く。神学校内の人間が消失するという事件が国外で起きているらしい、と。その日の午後の講義でイロハは意識を失う。目覚めて目にした光景は。

燃え少し。萌えなし。異世界転生でも主人公最強でもMMOでもな

いので需要はないかと思いますが、生温かい目でご覧いただければ幸いです。

## 紅葉の中で（前書き）

はじめまして。よろしくお願いします。

元旦から投稿を始めようと思っていたのにどうしてこじつなつた……。

## 紅葉の中で

紅葉の朱に包まれた境内に、乾いた音が響いていた。

十に満たないだろう少年と少女が木刀を手に打ち合っている。

剣の技量では少女が少年を寄せつけず、力や速さでは少年が少女を圧倒して、結果は互角。

だが、先に息が切れて相手についていけなくなるのは、決まって少女の方だった。

「じゃ、今日は終わりっ」

少年がそう宣言して、切っ先を下げた。

少女としては物足りないが、求めても付き合ってくれないのはわかっていたので彼の言葉に従う。

胴衣の袖で汗を拭う少女の左目の下には傷があった。

ムキになって少年に突っかっていった結果だが、少年の剣によるものではない。

弱った握力で打ち込んだせいで、剣を弾き飛ばされてしまったのだ。

それが顔にぶつかって、目立つ傷をこしらえる結果になった。

剣を修める家に生まれた少女としては、それくらいの傷は勲章のようなもの。

気にしたのは少年の方だった。

慌てふためいて謝り倒し、責任を取るとまで言い出した。  
そしてそれ以来、少女が疲れを見せると相手をしなくなったのだ。

「イモあるんだ。焼こうぜっ」

少年は箒を手に、石畳や砂利の上の落ち葉を集め始める。  
疲れ知らずの少年を横目に、少女は溜め息をこぼした。

不条理だ。

年齢は同じで体格もそう違わない。

それなのに、性差で片付けられないほど大きい身体能力の差が二人にはある。

その上、稽古を繰り返すうちに少年の剣の腕前も目に見えて上達している。

そう遠くない先、太刀打ちできなくなる予感があった。

「……おい、聞いてるか？ 火打ち石もってきてくれってばーっ」

「はいはい」

剣を鈍らせるような思考を振り切って、小走りにお勝手へ向かった。

少年が慣れた手つきで火をつけ、枯れ葉から煙が上る。

狼煙のようだ。

「なんか、尾張の国が強いらしいな……」

煙を見上げながら少年が言う。

どうやら、考えることは同じだったらしい。

「いずれ、攻めてくるかもね……この薩摩の国にも」

極東にある大和の国は、戦乱のまっただ中にある。

だが、大和が一つの形に統一されて戦乱が終結したのは  
それ  
からわずか一年後のことだった。

## 天葬

黒い僧衣を身に纏った司祭とその見習い四人が一軒の民家を訪れていた。

「ようこそおいでになりました。司祭様」

一団は家の住人から歓待を受けた。

心から喜ばれ、望まれ、彼らの家に迎え入れられた。

だが、司祭たちが足を踏み入れたその家は大きな哀しみで満たされている。

司祭は静かに溜息をつくとなるべく感情を殺して口を開く。

「して、天葬を所望されたのは」

「こちらです」

家主らしき壮年の男が司祭たちを先導した。

案内されたのは、いっそう深い哀の感情に沈んだ寝室だった。

「母　キャサリン・テイラーです」

ベッドに横たわる老婦人の姿を確認すると、司祭はその息子たちに視線を移す。

「別れは済まされたか」

「……はい。しかと」



頷く家族は一樣に涙を溜めている。

「では、キャサリン・テイラーその人を天へと送ろう」

「ご家族の方はお下がりにください」

見習いたちは老婦人の子息や孫を下がらせると、自分たちもより離れた場所に控えた。

司祭はベッドの前で片膝をつき、老婦人に両手をかざした。  
そして、彼の口が呪いの言葉を厳かに紡いでいく。

「お祖母さま……」

瞳に涙を溜める家族が見守る中、老婦人の体は光の粒に変わり、虚空へと溶けていった。

司祭は立ち上がると、ベッドの上に残された衣服に背を向ける。

「キャサリン・テイラーを天の御許へ送りました」

「ありがとうございます。ありがとうございます」

「司祭様と、母を迎えて下さった神に感謝を」

穏やかに微笑む司祭に、故人の家族は謝意を口にし、敬意の眼差しを注ぐ。

天葬の場において、神の代理人とも呼べる司祭は畏敬の対象だ。  
神の奇跡を垣間見た故人の家族はもちろんのこと、司祭の見習い  
たちにとっても同様に。

ただ　この場には一人だけ例外がいた。

四人いる見習いの中の一人。

その一人だけは、周囲とはまるで異なる視線を司祭に向けていた。

探るような、疑念の視線を。

「ねえ、おばあちゃんは、てんごくにいったの？」

「そうだよ。おばあちゃんはね、これから天国でおまえのことを見守っていてくれるんだ」

「いつか、ぼくがしんだら……おばあちゃんにあえる？」

「天国にいけたら会えるよ。だから、ちゃんといい子にしてなくちゃね」

キャサリン・テイラーの孫らしき幼子に、その両親が優しく諭している。

## 神学校と日課

小鳥が囀る早朝。

神学校の敷地を彩る青いアジサイに、一人の青年が水をやっていった。

黒髪黒瞳という異国の容貌以外にさして特徴はない。

ただ、二十代後半という年齢にしては覇気がなく、目元の隈が目立っている。

それは過去の労苦を示しているようでもあり、ただの寝不足であるようにも見えた。

青年　イロハ・イチジョウにとって、水やりは朝の日課だ。

イロハが籍を置くのは、博愛の神とその精神を敬い、尊び、学ぶ、神学校。

そのため、学生には何らかの奉仕活動が義務づけられている。

学校や寮、あるいは近隣地域の清掃活動を選ぶ学徒が多いが、イロハのように水やりでも構わないし剪定などでも問題ない。

とにかく自主的かつ継続的に行動することが求められているのだ。

「……今日あたり降ってくれないかね」

イロハが見上げる空は、真っ青だった。

西を眺めても雲はない。

青い花と緑の葉に水を投げかける。

アジサイたちはイロハ当人と同じく、今ひとつ水気に乏しかった。

アジサイが花を咲かせるこの時期　ヤマトの梅雨ほどではないが　ロンバルディア王国には雨が多い。

雲一つない快晴から急に天気が崩れることがままある。

とはいえ、一週間雨が途切れることもまた珍しくなく、現に今日で六日間雨がなかった。

わりと丈夫な植物とはいえ、少々きつい環境だ。

水やりを絶やせないイロハにとっても辛い。

降雨がない分、水量は大雑把でも構わないのがせめてもの救いだろっか。

イロハは敷地に流れる水路から水を補充して作業を続けながら、神学校を象徴する教会堂の前へやってきた。

教会堂の重厚な扉はまだ閉ざされている。

収容人数は神学校の学生数とほぼ等しい四百名ほど。

高さが二十メートルを超える屋根には尖塔が三本、山の字を連想させる形と高さで並んでいる。

大小様々な窓はステンドグラスで装飾されていて、外から見ると何の変哲もないが内部には美しく荘厳な光の絵画を演出しているはずだ。

イロハはこの教会堂が苦手だった。

理由はよくわからない。

ここの主である司祭への感情とは関係なく、あまりいい気分にならないのだ。

本能的な忌避感がある。

それはもしかしたら、教会堂の前に広がる広場を囲うように植えられたアジサイのせいかもしれない。

赤いのだ。

神学校内で咲く他のアジサイはどれも青いのに、このアジサイだけ赤い。

イロハは別に赤が嫌いなわけではない。

アジサイは青系統の方が雨に映えると思うが、赤系だって悪くはない。

イロハが生まれたヤマトの秋にも赤が多いし、むしろ赤は好きな色だ。

だが、このアジサイの赤はよくない。

どこか病的で、禍々しい気がして

「おっはよーさん」

イロハは挨拶が聞こえた方へ顔を向けた。

イロハが来たのとは反対方向から、神学校の黒い制服を着た二十歳前後の女学生がやってくる。

「ああ……おはよう」

「今日も眠そうだねえ、イロハくんは」

そう言って、同じく水やりを奉仕活動に選んでいるフランシーヌ・レクレールは微笑んだ。

金の髪に青い瞳は珍しくないが、イロハと同じく数少ない異国の出身者だ。

それ故にイロハとは気安い仲だった。

「そんな夜遅くまでなにしてるか興味あるなあ」

「……勉強だよ」

「ウソばかりー。それで授業中に居眠りじゃ、本末転倒だもん」

神学校は司祭などの神職を目指す者たちが集う教育機関だ。

宗教由来で国に属さないため、身分・国籍は不問。

イロハやフランシーヌのような異国人も教義的には差別されることはない。

また、年齢も十代後半から四十代までと、神職を目指す者たちに広く門戸を開いているのがうかがえる。

反面、生死を司る職を目指す以上、在学時に課せられる試験は厳しく、卒業できるのは入学時の半数以下と言われている。

「でもさ、わたしらの学年ってまだ誰も落第してないよね？」

「これから厳しくなるんじゃないか？」

イロハたちは第三学年だが、一、二年時は基礎的な講義ばかりだった。

天葬の付き添いも第三学年からだ。

「第一号にならないでね、イロハ」

「フランの方が成績悪くなかったか」

「ぐ……今に見てなさいよ。首席で卒業してやるんだから」

二人は赤いアジサイに水をやり、校舎へ歩いていく。



## 夢

桜の花弁が舞う中、少年は走っていた。

何かから逃れるように。

何かを求めるように。

少年が目指しているのは、幼馴染みがいる神社だった。

「……………かえでっ」

少年は幼馴染みの名を呼びながら階段を駆け上がった。  
彼女が住む家の戸を叩く。

反応はない。

焦燥に駆られ、何度も戸を叩き、何度も声を上げた。  
けれど　幼馴染みの少女もその家族も、誰も出てこない。

隣の家と同じだった。

やはり消えてしまったのだ。

少年の家族のように　。

「そ、そんな……………ことって……………」

少年は恐る恐る、叩いていた戸に手をかける。  
隣家のときは中に入るようなことはしなかった。



だが、ここは大事な幼馴染みの家。  
彼女たちの安否を確認せずにはいられなかった。

「かえで……？」

少年は恐る恐る足を踏み入れる。

室内はたいして暗くないのに、真っ暗闇の中にいるような錯覚に囚われる。

足が震え、進路が定まらない。

それでも、恐怖を噛み殺して家中を探して回った。  
請うように願うように、少女の名を呼びながら。

しかし、当たってほしくない予感当たってしまう。

幼馴染みの少女もその両親も、いなかった。見つからなかった。

少年は少女の家を飛び出した。

一縷の望みにかけ、少女がよく一人で稽古をしている神社の裏手へ走る。

砂利を踏み散らすたび、胸の中から何かがこぼれていくようだった。

結局、そこにも少女の姿はなかった。

少年は桜の花びらがまばらに散っている地面に膝をつく。

「父さん、母さん……かえで……みんなどこいったんだよ……」

農作業をしていた父親は、少年の目の前で光になって消えた。

着ていた服を、足下に残して。

少年は慌てて家に戻ったが、母も祖母もいなかった。

ただ軒先と台所に、二人が着ていたはずの服が投げ出されていて。

誰もいない家で一晚を過ごし、家族も幼馴染みも戻ってこないことを悟って、少年は町に出た。

人の姿を探して。

それから一年以上もの間、少年は人と出会うことはなかった。

## 魔女の噂

「……きて。起きてっば」

「あー……」

机に突っ伏していたイロハは背中を叩かれ目を開けた。

「おはよ。お昼食へに行こうよ」

傍らに立つフランシーヌに胡乱な目を向けた後、イロハは頭を振った。

「……くそ、なんで今ごろ」

「どしたの。ちよっと顔色悪いよ？」

「嫌な夢見た」

背もたれに体重をかけ、天井を見上げる。  
最悪な気分だった。

神学生たちが退席していく中、フランシーヌがイロハの隣に座る。

「どんな夢だったの？」

「夢というか、昔の……記憶だな」

「あー……ヤマト出身だもんね、イロハは」

およそ二十年前　ヤマトという国は、なくなった。

西方の国に取り込まれたというわけではない。  
文字通りの意味で、なくなったのだ。

住んでいた人間がすべて消失した、という形で。

その詳細は西方にはほとんど伝わっていない。

それが起きたのが知名度の低い極東の国だったせいもあるだろうし、その出来事そのものが忌避されているせいでもあるだろう。西方では誰もその話題に触れたがらない。

国も個人もヤマトで何が起きたのかを知らうとしないのだ。

無人となった土地に入ろうとする者も皆無だった。

盗みを生業とする人間さえも、廃墟と化したヤマトには立ち入らない。

そして現在、西方の国々ではヤマトという国が存在したことすら忘れられている。

「あれでしょ、国に帰ったらみんないなくなってた、って……」

「ああ……」

生き残ったのは諸外国との外交や交易に携わり、国外にいた人間だけだ。

世界全体で数えても、ヤマトの生き残りは三桁止まりだろう。

イロハもその中の一人、ということになっている。

「あ、いなくなったで思い出した。気になる噂があるんだよね」  
「噂？ ヤマトの？」

「違う違う、神学校のこと。知らない？」

「さあ。どんな噂だ？」

「神学校の学生が消されてる、ってやつなんだけど」

「それ、詳しく教えてくれ、フラン」

イロハは机に手をつき、フランシーヌに勢いよく顔を近づける。

「うわ、食いついた」

「いいから」

「んー、食堂でつて言いたいところだけど……ま、いいか」

イロハの顔を押しやりながら、フランシーヌは話し始める。

「えーとね……神学校の生徒がね、服を残して消えちゃってるらしいの」

「それは、この神学校の話……じゃ、ないよな」

「それどころか国外の話だよ。姉さんからの手紙に書いてあったんだから」

フランシーヌの姉はロワール王国にいる。

今でこそ手紙のやりとりをしているが、フランシーヌが異国の神学校に通っているのは姉との確執が原因だとイロハは聞いていた。

なにやら、司祭を目指すのを頑なに反対されらしい。

理由を聞いてもはぐらかされるばかりで答えてもらえず、結局フランシーヌが家を飛び出す形になった、と。

フランシーヌが神学校に入学してからは、もう仕方ないということとで関係はそれなりに修復されたようだ。

「消えたのも一人二人じゃなくて、神学校ごとなんだって」

「学校ごと？」

「そ。学生も教師も司祭様もまとめて……何百人もいっぺんに」

規模の大きさに、イロハはさらに興味を引かれる。

「一校だけじゃなくて、何校も。だから噂になってるみたいで……」

「特に騒ぎになってない理由もそれか……」

「たぶんね。本当に起きたことだって思われてないんだよ。わたしも信じられないし……イロハの感想は？」

「あるのか、って……感じだな」

「……ある？」

「俺が知る限り……」

思わず本音を出しかけ、イロハは口ごもった。

「ん？ なに？」

「いや……。それって、神学校が狙われてるみたいな話だと思うか？」

「どうだろね。でも、本当だとしたらそうなるんじゃないかな。犯人は魔女だって言われてるらしいし」

数百人単位での失踪　消失。

自然現象なら神学校にばかり当たるのは不自然だ。  
だとすれば、それを引き起こした存在がいる。

そして　規模は段違いだがヤマトで起きた人間消失もまた、誰かがやったということになる。

「魔女か……会ってみたいな」

「ちよつと……やめなよ？ 噂がほんとだったら消されちゃうってことじゃない」

「神学生だって知られなかったらいい。それに、目があっただけで消されるなんてことはないはずだ。神学校の敷地外で会えれば……もつと詳しい話、姉さんに聞けないか？」

「まったくもう……意外と向こう見ずなんだから」

フランシーヌは呆れたように溜息をつき、席を立った。

「その話は後、お昼ごはんが先！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4427ba/>

---

十三番目の秘術

2012年1月12日18時58分発行